

# フクシマの林業従事者が安心して働ける職場環境づくり

岐阜県立森林文化アカデミー 森と木のクリエイター科 2年 渡邊 篤慶 わたなべ あつり

## 要旨

当研究は、原発事故後の福島県の林業従事者が安心して働ける職場環境作りを目的としました。いわき市のA社協力のもと、林業従事者へのヒアリング等を実施した結果、林業従事者は様々な不安を抱えているが、会社に相談できないこと、知識不足が不安を強くすることがわかりました。この不安を解消するには、放射線に関する勉強会の開催、情報の開示、想いを話し合う機会の設置の3点が重要であると考えました。

## はじめに

平成23(2011)年3月11日、14時46分18秒、東北地方太平洋沖地震が発生しました。それと同時に東京電力福島第一原子力発電所の事故がおきて空気中に大量の放射性物質が放散しました。福島県を中心に広範囲の森林が高濃度の放射性物質により汚染されました(図1)。森林に入ることができない地域が生じただけでなく、薪・しいたけ原木の出荷停止や木材の風評被害などの問題が発生しました。そのため、森林組合等の仕事は減少し、閉鎖に追い込まれる事業体もありました。また、仕事以外でも家族の避難、健康に対する不安などから、林業従事者は厳しい現実さらされています。その中で林業従事者が安心して働くことができているのかと疑問を持ちました。



図1 汚染状況地域と東京電力福島第一原子力発電所

## 1 研究の目的

福島県の林業従事者は減少傾向にあり、福島県の森林・林業を再生させる上で、林業従事者の確保は必要不可欠です。そのためには、林業従事者が安心して働ける職場環境が重要です。当研究では原発事故後の林業従事者の心理的不安や葛藤等の「こころの声」を聴き、林業従事者が不安を軽減し安心して働ける職場環境づくりを提案します。

## 2 調査対象

調査地は、父の実家がある福島県伊達市で森林・林業に関わっていききたいという思いから、当初、伊達市周辺を予定しました。しかしながら、伊達市周辺の林業事業者と打ち合わせを行った結果、事故後の放射線被害による事業量の減少や事業者の閉鎖・合併などで、調査の受け入れが困難であることがわかりました。

そこで、福島県森林組合連合会に相談したところ原発事故後も、森林・林業の復興や意欲的に林業に取り組んでいる会社があるとの情報が得られ、いわき市にあるA社を紹介いただきました。A社へ訪問し、調査の協力を要請したところ、受け入れが可能との返答をいただき、A社を調査対象としました（図2）。



図2 避難指示解除準備区域等とA社の位置

資料：経済産業省ホームページ「原子力被害者支援」

A社は、木材の運搬をはじめ、ペレットやチップの製造、製材と素材生産事業を行っている会社です（表1）。従業員は250名で、同社の素材生産部門である山林部10名と管理担当者に協力をいただき調査を行いました。地震直後、A社の運輸部門は燃料不足により業務が停止し、山林部は原発事故直後、3週間、現場作業は中止に追い込まれました。また、原発事故が原因で2人退職をしています。現在は、原発事故前の作業状態に戻っています。

表1 A社の概要

所在地	福島県いわき市
主な事業	・ 木材運搬 ・ 木質ペレット ・ 素材生産 ・ 木材チップ
従業員	250名
事故後の変化	・ 事故発生後、3週間作業がストップ ・ 2人退職（事故がひきがね）

### 3 調査方法

最初に、会社としての放射線に対する事故後の取り組みおよび今後の予定について管理担当者へヒアリング調査を行いました。次に、作業の実態調査を行いました。私自身が作業に参加し、作業状況を確認するとともに作業地の放射線量の測定も行いました。さらに、山林部10名に対してヒアリング調査を行いました。なお、調査にあたっては、通常のヒアリングやアンケートでは想いを深く知ることが難しいと考え、インターンシップを通じて1週間共に作業を行うことで、時間をかけながらゆっくりと聴くことに努めました。調査内容は、一人一人の基礎情報をはじめ、健康に対する不安や将来に対する不安、家族への思いなどとなりました。

### 4 結果

#### (1) 会社の取り組み

平成24年4月から平成25年3月までの一年間は作業中の被ばく量の測定を行っていました。クイクセルバッジと呼ばれる線量計を各森林技術者の胸に装着して測定していました。測定期間中の結果が全員基準値以内であることを確認し測定は終了しており、現在は行っていません。

現在は、事業箇所の放射線量について事前調査を毎回行い、基準値以下（ $2.5\mu\text{Sv/h}$ 以下）であることを確認してから事業を行っています。しかしながら、森林技術者には、調査結果を具体的な数値ではなく「大丈夫である」と伝えているだけでした。また、心理的なケアの取り組みは、特に行っていませんでした。

#### (2) 作業の実態調査<インターンシップによる調査>

インターンシップ期間は、平成25年8月5日から8月9日です。山林部は、いわき市内で四か所の現場作業を行っていました。そのうちの二ヶ所で放射線量の測定を行いました。作業開始前（8時）と作業終了後（16時）の1日2回、地上から1mの高さで測定しまし

た。測定結果は 0.07~0.19 $\mu$  Sv/h で基準値以内でした。基準値以内であるため、予防着やマスクの着用はしていませんでした。そして、作業後の着替えも行っていませんでした。

### (3) ヒアリング調査

山林部の森林技術者 10 名にヒアリング調査を行いました。

基礎情報は、30 代が 1 名で 40 代が 5 名、50 代が 4 名で全員、男性でした。出身地は、福島県内が 8 名でその内、Uターン者が 1 名でした。他、茨城県に 1 名、愛知県に 1 名でした。10 名全員、家族や両親と同居しており、そのうち 3 名は独身者、7 名は既婚者でした。

健康に対する不安について、「身体に対する心配はないですか？」と質問したところ、「放射線による身体への影響が心配で被ばくの恐れがあるのではないか」という声や「病気になった場合の保証が心配」、「家族の生活や経済的な事が心配」と回答がありました。また、「他県への移住を考えている」という声も聴かれ、深刻な状態であることがわかりました。

これらのことから、全ての方が健康に対する不安を持っていることがわかりました。将来に対する不安について、「放射線の影響で今後の仕事に対する心配はないですか？」と質問をしました。回答は、「木材の風評被害で福島の林業が継続していけるのか心配」という声が聴かれました。30 代と 40 代前半の森林技術者は、転職も検討していました。このことから、将来に対する不安が大きいことがわかりました。また、50 代の森林技術者は、「今更、他の仕事はできない」と話しており、このまま定年まで林業に従事し退職を考えているため、仕事に対する将来の不安は少ないのではないかと考えます。

家族への想いについて、「家庭内での様々な心配はありませんか？」という質問をしました。回答では、「子供や孫の健康が心配」という声が聴かれました。また、「両親の介護や家族の生活、住宅ローンなどで離れられない」との話も聴けました。これらのことから、子供や孫と同居している家庭では健康に対する不安が強いことがわかりました。また、様々な事情や移住したくてもできないという葛藤がある中、仕事をしている事がわかりました。

相談できる相手の有無について、「他の方に相談はされていますか？」と質問をしました。森林技術者全員が家族に相談していると答えたが、会社に相談している森林技術者はいませんでした。このことから、不安をなかなか口に出せず、個人の想いが事業者には伝わっていないことがわかりました。また、森林技術者同士でも想いを共有できていないこともわかりました。

放射線の知識についても質問しました。線量を一時間量、一日量、年間量で計算できるか、また理解できているかで放射線に対する知識が深いか浅いかを判定しました（表 2）。10 名中 6 名は、放射線の数値に対する理解が曖昧で知識が浅いことがわかりました。また、知識が浅い 5 名は、不安が強いこともわかりました。このことから、放射線に対する知識が浅い森林技術者は、不安が強い傾向がみられました。そして 10 名中、知識の深い 4 名は、各班の班長と副班長でした。知識の深かった各班の班長と副班長は、自ら放射線のことを学んでいると考えます。

表 2 放射線の知識と不安の関係

区分		知識	
		深い	浅い
不安	強い	2名	5名
	弱い	2名	1名

## 5 職場への提案

調査結果をもとに、個人の不安を少しでも軽減して安心して働ける職場環境をつくるため、A社に次の取り組みについて以下の提案を行いました。

- 1) 正しく明確な情報を細部まで伝える。

森林技術者に「大丈夫である」という言葉ではなく、数値を明確に伝えて情報を共有し、その数値がどのような状態であるのかを自ら学んでいくことが、大切だと考えます。

- 2) 社内で様々な想いを話し合える機会を設ける。

山林部で話し合える機会を仕事終了後や週単位などで時間を設けて、その話し合った結果を社内全体に伝え、意見交換を行っていくこと大切だと考えます。

- 3) 放射線についての勉強会など、正しい知識を持てるような機会を設ける。

放射線についての最新情報や知識を管理者や班長、副班長だけでなく、森林技術者一人一人も同じ情報と知識を持ち、作業に取り組むことで、放射線に対する不安を少しでも軽減することができると考えます。

これらの三点の提案に対しA社から取り組んでいくとの内諾をいただきました。私は、来年度からA社で働く予定であり、前職である看護職の経験もふまえ、不安の軽減について取り組む予定です。そして、林業従事者が安心して働ける職場環境をつくっていきたいと考えています。

## おわりに

東日本大震災後の福島県の森林や林業がおかれている厳しい現実を把握することができました。また、不安や葛藤を抱えながら現場で働いている森林技術者の想いも聴くことができました。一人一人の不安や問題を個人で全て解決することは難しいと考えます。そのようなことから、会社全体で支援し取り組むことによって、林業従事者が不安を少しでも軽減し安心して働ける職場環境をつくるのが大切だと考えます。

## 参考・引用文献

- ・ 林野庁 林業白書